

財団創立四十五周年記念

杵勝会全国大会

日時／平成二十五年六月二十九日（土）

午前十時三十分開演

会場／京都南座

主催／一般財団法人 杵勝会
後援／京都府 京都市

ご挨拶

一般財団法人 杵勝会

八代目家元 杵屋 勝三郎



爽やかな初夏の季節となりましたが、皆様におかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

本日は杵勝会全国大会にご来場賜りまして誠にありがとうございます。第十回という記念すべき全国大会を、栄えある京都南座にて開催できますことは、全国各地の会員の皆様方のご協力の賜物と心より感謝申し上げます。

去る昭和四十二年、文化庁より財団法人の認可が下りて早四十五年が経ちました。平成二十年に新しい公益法人制度が施行されたことに伴い、当法人も本年四月一日付で一般財団法人に移行し、新たな一歩を踏み出したところです。今後は従来の演奏活動に加え、公益事業としての長唄普及と次代を担う演奏家の育成に力を入れていきたいと考えております。引き続き、皆様方のご支援とご協力をお願いいたします。

さて本日の演奏会は、杵勝会員による祝典曲「元禄花見踊」の二百人大合奏から始まり、廻り舞台による「櫓三番叟」「君が代松竹梅」の祝典演奏、次世代を担うこども楽団により「ともやっこ」、杵勝三伝の内「安達ヶ原」「船弁慶」を含む全二十八曲を演奏致します。最後に全国大会では毎回ご好評をいただいております杵勝会恒例の長唄名曲メドレー『抄曲集』四季遊景抄』をお送りいたします。南座の舞台装置を駆使した立体演奏にどうぞご期待ください。

また、本公演に於きまして私の娘が杵屋あまねとして「二人枕久」で初舞台を踏ませていただきます。まだまだ未熟ではございますが、今後の皆様のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

初夏の一日、今日一日の為に全国各地よりご参集くださいました会員の方々と共に、和やかな演奏会となりますよう念じ、開催にご尽力くださいました方々への感謝も併せてご挨拶いたします。

終演までごゆっくりお過ごしください。ありがとうございました。幸甚に存じます。

ご挨拶

一般財団法人 杵勝会

理事長 杵屋 勝国



緑の梢にそよぐ風はすでに夏の気配です。

皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて本日、杵勝会全国大会京都南座公演の開催にあたりましては、杵勝会会員各位を初め、非常に多くの皆様のご協力をいただきましたことに心より御礼申し上げます。

昭和四十六年より四年に一度のペースで開催して参りました全国大会を、本日は日本文化の発祥の地とも言える京都南座で公演できますことを、大変意義のあるものと感じておりますと同時に、私にとりましても幸せなことで存じます。

来たるべき新世紀に向けて、長年培って参りました経験を基に、次代を担う後輩たちに伝統芸能を正しい形で引き継ぐためにも、皆様と共に、これからも日々厳しい修練を積み真摯に芸道を貫いて参る所存でございます。

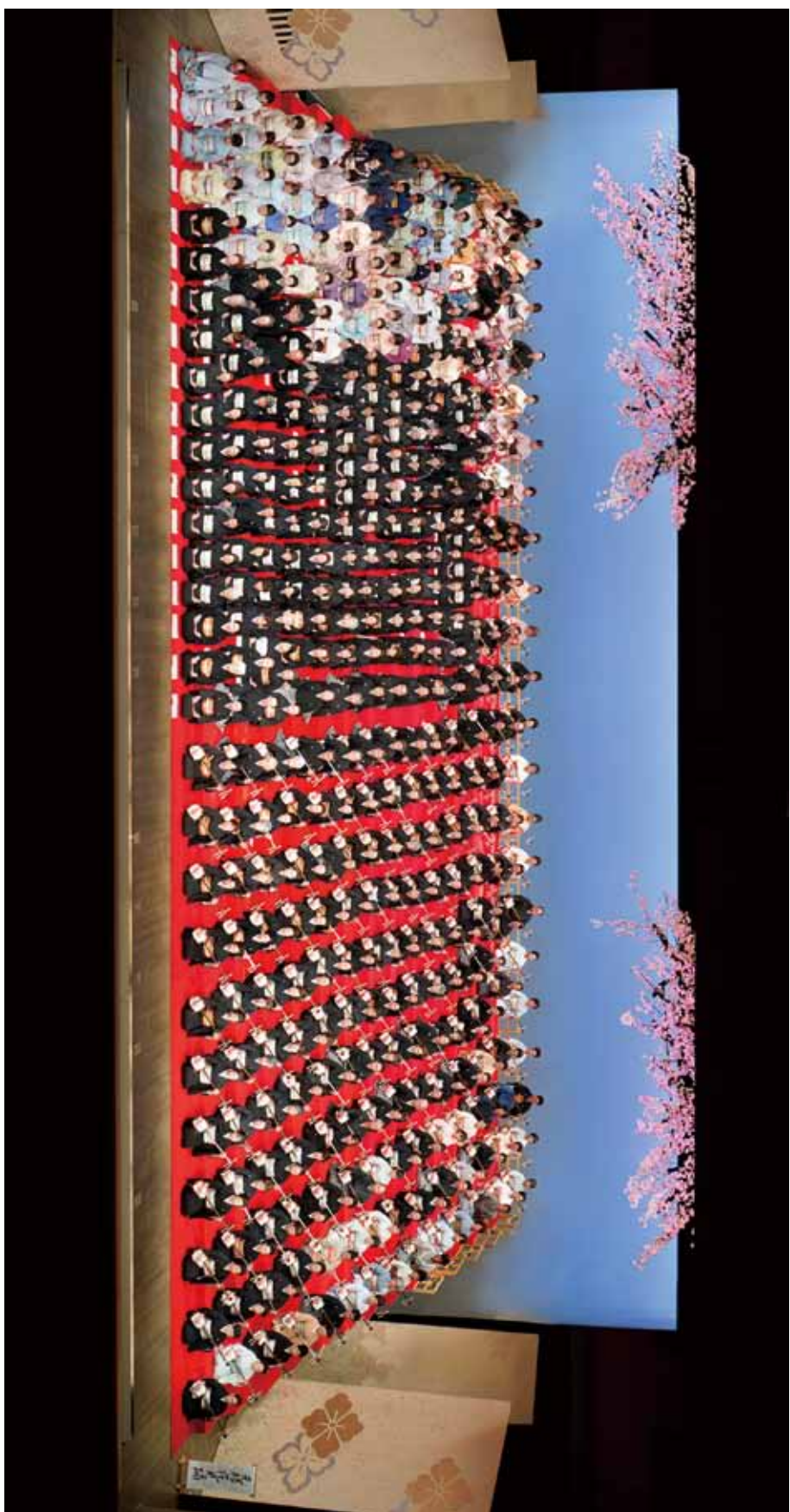
また、今回八代目家元のご息女杵屋あまねさんが初舞台を踏まれることとなりました。次の時代の長唄のホープとして、私も期待している方でございます。

どうぞ皆様、あまねさんの演奏を楽しみにお聞きいただきますようお願い申し上げます。

このたびの記念公演の開催にあたりましては、日頃よりご後援くださいます皆様方のお支えがあればこそと深謝いたします。

何卒終演まで賑やかに、心豊かなひとときをお過ごしください。また、よう盛会を念じまして、私の挨拶といたします。

平成二十五年六月二十九日



平成22年 八代目杵屋勝三郎襲名披露長唄演奏会 於 国立大劇場
祝典演奏 『元禄花見踊』

番

組

祝典曲

元禄花見踊

老松

越後獅子

漁師

勧進帳

流れ・夜遊樂

月の巻

連獅子

越後獅子

廓丹前

(十四時頃)祝典曲

櫓三番叟

(廻り舞台)

君が代 松竹梅

勧進帳

風流船揃

二人椀久

ともやつこ

竹生島

俄獅子

廓丹前

(十六時頃)喜撰

連獅子

柳橋

越後獅子

安達ヶ原

鷺娘

(十八時頃)船弁慶

綱館

黒塚

(十九時半頃)抄曲集

四季遊景抄

両国八景

鷺娘

藤音頭

秋の色種

佃

狸

大薩摩

韮猿

(二十時半頃終演予定)



祝典曲

元禄花見踊

(二百人大合奏)

(舞台面)

(太字は師範)

柏原朱乃	山口永里子	山口和恵	山本富枝	早川珠美亜	日野陽子	鈴木由貴	渡邊駿一朗	杵屋寿桃
辻井英里	杵屋裕太喜	杵屋勝都明	杵屋勝邑喜	杵屋勝四羽	杵屋勝禄主	杵屋寿慈	杵屋浩緑	杵屋和錦
大平紀代子	杵屋勝湖弘	杵屋勝市	杵屋勝進純	杵屋勝久御	杵屋勝禄愛	杵屋浩波美	杵屋実基	杵屋勝陽祥
森影知子	杵屋勝英治	杵屋勝如	杵屋勝勢秀	杵屋勝四臣	杵屋勝禄彩	杵屋勝崇美	杵屋勝昌基	杵屋勝陽沈
田浦和子	杵屋勝三祐	杵屋勝欣原	杵屋勝勢和	杵屋勝貴崇	杵屋勝粧	杵屋浩延	杵屋勝美英	杵屋勝良久
森本晴子	杵屋勝桃栄	杵屋勝欣久	杵屋勝巴昭	杵屋和崇邦	杵屋勝良美	杵屋勝浩菜	杵屋勝志英	杵屋勝久年
末吉秀夫	杵屋勝三彩	杵屋勝欣嘉	杵屋勝勢奈	杵屋勝寛弥	杵屋和加佐	杵屋勝久輝	杵屋勝清景	杵屋勝花野
大野八重子	杵屋裕三郎	杵屋勝欣次	杵屋勝勢蓮	杵屋勝三弥	杵屋勝桂	杵屋勝七葉	杵屋勝浩代	杵屋勝野
溝口実千代	杵屋裕光	杵屋勝七郎	杵屋勝禄	杵屋勝三郎	杵屋勝寿治	杵屋勝進次	杵屋寿美造	杵屋勝幸恵

(三味線)

(九段)

(八段)

(七段)

(六段)

(五段)

(四段)

(三段)

(二段)

(一段)

杵屋勝代 杵屋利光 杵屋勝彦 杵屋勝四郎 杵屋東成 杵屋勝之弥 杵屋勝六三 杵屋勝昭 杵屋勝良

小出美智子 杵屋和富二 杵屋和桜 杵屋勝桃 杵屋勝奈栄 杵屋勝登紀 杵屋勝有美 杵屋勝弘弥 杵屋勝宇女弥

川本珠代 杵屋勝寿真 杵屋勝欣太 杵屋勝琉 杵屋勝晶栄 杵屋勝三保 杵屋勝有清 杵屋勝文丘 杵屋勝湖華

早崎喜代江 杵屋勝浩祐 杵屋勝照寿 杵屋勝桃貴 杵屋勝文栄 杵屋寿美恵 杵屋勝龍 杵屋勝文慈 杵屋勝宇千弥

鮎子田弘子 杵屋勝浩朗 杵屋禄宣岬 杵屋勝桃麻 杵屋勝綾奈 杵屋勝巴寿 杵屋勝有悠 杵屋勝四邦 杵屋勝宇玉恵

宮本杏子 (三味線) 杵屋勝佳乃 杵屋禄邦 杵屋勝千代 杵屋禄三彦 杵屋勝巴弥 杵屋勝有紅 杵屋勝洋怜 杵屋勝昭遊

鈴木弘秋 平野和子 杵屋禄明 杵屋勝る之 杵屋禄三吾 杵屋勝巴孝 杵屋勝一佳 杵屋勝洋栄 杵屋勝湖帆 (唄)

杉山直子 長谷川訓子 杵屋勝禄帆 杵屋勝る蝶 杵屋禄三香 杵屋勝巴治 杵屋勝有湖 杵屋勝彦翠 杵屋勝乃夫

飯田朝美 鈴木綾子 磯貝明美 杵屋勝る菊 杵屋東花 杵屋勝勢正 杵屋勝有静 杵屋勝寿穂 杵屋勝由梨

塩田尚子 寺尾勇 田中敦子 兵頭玲子 辻本紘子 杵屋勝有香 横澤順子 杵屋勝美紀

蕪木広江 松本るい子 岩田具子 阪本明子 大林翠 佐藤美代子 吉川和子 中村淑子

田村日出子 福島三枝 角丸朋子 梅本御前 黒田まゆ 古寺太幹 波多野洋子 吉野洋子

高崎香苗

老

高松清香会

松

杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋
巳津也	巳之助	勝吉治	利光	勝四郎	勝扇香

(唄)

杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝千次	勝進良	裕太郎	勝国修	勝正雄	勝三郎

(三味線)

大鼓中	大鼓望	立鼓望	小鼓梅	小鼓福	笛福
村	月	月	屋	原	原
寿慶	太明之	太明吉	小三郎	貴三郎	寛

越

後

獅子

杵屋勝松社中

(舞台面)

嶋	鈴	伏	井	久	村	平	勝	松	深	森	橘	桑
野	木	見	上	光	田	田	又	岡	沢	田		原
浩	結	和	知	牧	知	光	徳	裕	のり	ゆかり	麻	佑
詔	葵	貴	子	子	左	子	清	子	子	子	子	佳

(三味線)

穂	蝦	小	鈴	西	杵	杵	杵	杵	杵	高	森	村	大
阪	名	林	木	川	屋	屋	屋	屋	屋	川		田	路
初	明	茂	幸	敏	勝	勝	勝	勝	寿	紀	多	美	
枝	子	雄	子	子	松	松	松	松	希	子	永	穂	泉

(三味線)

野	杵	杵	杵	栗		鈴	杵	川	杵	木	杵	森	杵		杵	永	小
崎	屋	屋	屋	田		木	屋	島	屋	畑	屋	田	屋		屋	野	峰
清	佐	松	浩	久		弘	勝	郁	東		勝		利		浩	智	慶
江	二	紀	基	子		子	四	子	成	清	彦	清	次		幸	恵	子

(三味線)

(唄)

(三味線)

蔭

囃

子

勸

杵屋勝志咏弥社中

進帳

(舞台面)

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	上
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝国悠	勝十朗	勝咏弥尋	勝正雄	勝志咏弥	勝三郎	勝咏弥絹	浩基	裕光	

(三味線)

芳	杵	松	芳	杵	杵	杵
村	屋	永	村	屋	屋	屋
辰三郎	巳之助	忠次郎	伊四郎	勝吉治	禄丈	丈一朗

(唄)

大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	小鼓	笛
望	望	望	中	福	藤
月	月	月	村	原	舎
大明吉	大明藏	太三郎	寿慶	貴三郎	貴生

漁

杵屋勝禄社中

師

杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋
丈一朗	禄丈	勝二美	東成	勝千雅

(唄)

杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋
勝友美	禄山	勝陽女寿	勝富洋	勝陽

(三味線)

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	笛
望	望	望	望	藤
月	月	月	月	舎
大明吉	大明之	大明藏	太意三郎	次生

流れ・夜遊樂

杵屋勝国社中

(舞台面)

林	栗	入	古	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
	川	江	閑	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
昌	亮	千	直	勝	勝	和	勝	勝	勝	勝	勝	和	和
也	一	明	子	久に智	国	次郎	勢諷	都栄	靖寿	久に藤	東英	東八	

(三味線)

(三味線)

杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋
勝	勝	和	勝	和
寿	錦	東	文	東
浩	造	文	寿	歌

(唄)

月

の 卷

杵屋勝幸恵社中

(舞台面)

杵	松	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	高	小	杵
屋	本	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	橋	泉	屋
勝	眞	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	公	晴	勝
良	佐	幸	彦	朗	松	文	梨	邦	萩	雄	令	子	湖	悠

(唄)

(三味線)

杵	杵	杵	安	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	渡	杵
屋	屋	屋	田	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	部	屋
勝	勝	勝	く	東	勝	勝	勝	勝	勝	和	勝	真	勝	
幸	昭	幸	に	成	夫	幸	壽	友	真	雪	十	理	壽	
心		太	子			恵			一	路	朗			

(唄)

(三味線)

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	笛
堅	望	堅	望	中	藤
田	月	田	月	村	舎
喜	太	新	太	寿	貴
三	津	十	三	慶	生
久	之	郎	郎		

連

獅子

藤舎呂悦指導

杵	杵	東	杵	杵	(唄)
屋	屋	音	屋	屋	
勝利郎	利次郎	味見純	勝彦	勝四郎	

杵	杵	杵	杵	杵	(三味線)
屋	屋	屋	屋	屋	
勝進良	勝国毅	勝十朗	浩基	勝三郎	

太鼓	太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	小鼓	小鼓	笛
小	叶	富	富	菊	ふ	弥	弥	藤
	千	美	美		く	千	寿	舎
扇	沙	毬	祐	乃	光	穂	葉	貴
								生

越 後 獅子

杵屋勝欣次社中

(舞台面)

杵	杉	岡	名	岡	平	久	杵	木	村	米	吉	佐	神	杵
屋	本	本	田	本	井	下	屋	太	上	田	村	藤	野	屋
勝	敦	理	有	麻		英	勝	紀	峰	夏	友			欣
欣	子	奈	花	奈	薰	孝	欣	子	仁	麻	伽	翼	学	之
原							次							助

(三味線)

木	杵	杵	杵	杵	金	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
下	屋	屋	屋	屋	藤	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
晴	勝	勝	勝	勝	恵	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝
音	欣	欣	欣	欣	理	欣	欣	欣	欣	欣	欣	欣	欣
	成	恭	柳	緒	子	蝶	太	清	久	嘉	駒	鶯	丸

(唄)

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	笛
望	望	望	梅	望	藤
月	月	月	屋	月	舎
太明	太明	太明	小三	清三	次
吉	之	藏	郎	郎	生

廓

丹

前

高松清香会

杵	杵	杵	東	杵	杵	杵
屋	屋	屋	音	屋	屋	屋
巳	勝	祿	味	勝	利	勝
津也	四	丈	見純	吉治	光	四郎

(唄)

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
和	裕	寿	勝	勝	勝	勝
吉	太郎	哉	寿朗	正雄	三郎	久美香

(三味線)

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	笛
望	望	堅	中	福	福
月	月	田	村	原	原
清三郎	太津之	新十郎	寿慶	貴三郎	寛



祝典曲



櫓 三 番 叟

杵勝会男子会員

(舞台面)
○

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝千吾	裕辰	寿希	勝国毅	宣三	勝三四次	和吉	勝千次	勝国修	寿哉	勝進良	勝国悠	和十郎	

(三味線)

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵		杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋		屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
胡節郎	勝四寿	利次郎	勝吉治	利光	勝彦	勝四郎	東成		勝三郎	勝国	裕光	勝松	勝正雄	勝十郎	裕太郎

(唄)

(三味線)

杵	杵	杵	杵	杵	杵	坂		杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	田		屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝六三	丈一朗	寿典	禄丈	勝利郎	勝之弥	仙蔵		勝寿治	勝禄	勝進次	勝七郎	勝寿朗	浩基	禄山	

(唄)

(三味線)

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	笛
堅	中	堅	望	福	福
田	村	田	月	原	原
新十郎	寿慶	喜三久	太津之	貴三郎	寛

(廻り舞台)

君が代
松竹梅

眞幸会

(舞台面)

○

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	和	勝
壽	久に緒	孝	栄美	幸恵	代	如	由葵	季	久に光

(三味線)

○

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝	勝	勝	幸	勝	勝	勝	勝	和	勝
眞規	理恵	之里	子	一佳	良	昭	乃夫	里乃	乙佳

(唄)

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	笛
望	望	望	望	梅	藤
月	月	月	月	屋	舎
清三郎	太明之	太明藏	太意三郎	小三郎	次生

勸

進帳

藤舎呂船指導
藤舎名生指導

杵	杵	今	杵	杵
屋	屋	藤	屋	屋
勝	祿	政	直	東
之	丈	貴	吉	成
弥				

(唄)

上				
杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋
勝	勝	祿	勝	勝
七	十	山	松	祿
郎	朗			

(三味線)

大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	小鼓	笛
先斗町	先斗町	先斗町	先斗町	先斗町	先斗町
市	市	市	市	朋	豆
			さ		千
菊	豊	若	よ	佳	佳

風流船揃

杵屋勝祿社中

(舞台面)

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝四寿	勝祿寿	祿宣輝	東成	勝宣幸	勝祿亘	勝祿	祿宣香	宣三	勝祿朱	

(唄)

(三味線)

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
丈一朗	勝祿紅	祿宣華	祿丈	祿宣悦	勝宣江	勝宣絵	祿山	祿宣保	勝国悠	

(唄)

(三味線)

太鼓望	太鼓望	立鼓望	小鼓望	小鼓梅	笛藤
月	月	月	月	屋	舎
清三郎	太明之	太明藏	太意三郎	小三郎	次生

二人 椀久

家元息女

(唄)

杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋
勝之弥	勝吉治	利光	勝四郎	東成

(三味線)

杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋
勝祿	勝十朗	勝正雄	勝国	あまね

大鼓堅	立鼓堅	小鼓望	小鼓福	笛福
田	田	月	原	原
新十郎	喜三久	太三郎	貴三郎	寛

ともやっこ

子供楽団

(舞台面)

柏	杵	豊	岩	杵	柳	村	杵	味	早	柴
原	屋	島	崎	屋		松	屋	見	川	原
朱	浩		玖	勝	悠	翔	寿		珠	
乃	基	愛	道	三郎	作	一郎	哉	優	美	遥
高三		高二	高二		中一	中二		中三	小六	中二

(三味線)

小	小	谷	杵	小	西	杵	木	柿	東	沼	沼	芳	森	森	杉
森	森		屋	林	澤	屋	下	木	音	野	野	村	山	山	浦
美	峻	悠	利	史	幸	勝	晴	智	味	莉	竜	辰	璃	桜	可
玖	生	生	次郎	織	子	吉治	音	喜	見純	子	也	三郎	子	子	南子
小一	小二	小二		小三	小三		中二	小六		小六	小二		小三	小一	小一

(唄)

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	笛
中	中	中	望	山	福
川	村	川	月	田	原
陽	寿	翔	太		
渡	慶	哉	三郎	崇	寛
小四		中一		中三	

竹

生島

杵屋勝欣次社中

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝欣清	勝欣恭	勝欣駒	勝欣緒	勝欣久	勝欣蝶	勝欣太

(唄)

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝欣鶯	勝欣柳	勝欣丸	勝欣原	勝欣成	勝欣嘉	勝欣次

(三味線)

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	笛
望	望	望	望	福	藤
月	月	月	月	原	舎
太明吉	太津之	太明藏	清三郎	貴三郎	次生

俄

獅子

杵屋勝有美社中

(舞台面)

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝三四次	裕太郎	勝寿朗	勝松	勝三郎	勝進次	勝正雄	宣三	浩基

(三味線)

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
寿典	勝有生	勝有紀	勝有紅	勝有香	勝有湖	勝有悠	勝有美	勝龍	勝有清	勝有絢	勝有扇	勝有静	勝直次	勝六三

(唄)

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	笛
堅	中	望	梅	望	藤
田	村	月	屋	月	舎
新十郎	寿慶	太意三郎	小三郎	太三郎	貴生

廓

丹
前

杵屋東成指導

(唄)

杵	杵	芳	杵	松	杵	松
屋	屋	村	屋	永	屋	永
直	丈	辰	祿	忠	東	和
吉	一	三	丈	次	成	三
	朗	郎		郎		津
						夕

(三味線)

杵	杵	杵	杵	杵	祇園甲部	杵
屋	屋	屋	屋	屋	小惠美	屋
勝	宣	祿	勝	勝		勝
寿	三	山	松	七		祿
治				郎		

太鼓堅	大鼓祇園甲部	立鼓堅	小鼓望	小鼓祇園甲部	小鼓中	笛福
田		田	月		村	原
新十郎	小喜美	喜三久	太津之	千紗子	寿慶	寛

連

獅子

杵屋勝志咏弥門弟

杵	杵	芳	今	杵	杵	杵
屋	屋	村	藤	屋	屋	屋
勝利郎	丈一朗	辰三郎	政貴	勝吉治	勝之弥	東成

(唄)

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝祿	裕太郎	宣三	浩基	勝志咏弥	勝三郎	勝咏弥晶

(三味線)

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	笛
望	中	望	望	望	藤
月	村	月	月	月	舎
太明吉	寿慶	太明藏	太意三郎	太津之	貴生

喜

撰

高松清香会

(舞台面)

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝進良	寿哉	勝国修	勝正雄	勝芳香	勝三郎	勝寿朗	宣三	勝三四次

(三味線)

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	今	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	藤	屋
丈一朗	利次郎	勝菊香	勝吉治	勝弓香	利光	勝重香	政貴	勝四寿

(唄)

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	笛
望	望	望	梅	望	藤
月	月	月	屋	月	舎
太明之	太意三郎	太明吉	小三郎	清三郎	次生

柳

平成九年
川崎哲男作詞
杵屋勝国作曲

杵屋勝国社中

橋

(舞台面)

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵	宮
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	澤
勝	勝	和	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	誠
国	貴	栄	邑	芳	国	国	く	く	く	
毅	栄	邦	喜	歌	康		廣	緒	光	

(三味線)

東	松	杵	杵	杵	杵	立	杵	杵
音	永	屋	屋	屋	屋	石	屋	屋
味	忠	勝	勝	勝	勝	洋	勝	利
見	次	四	く	く	く	子	彦	次
純	郎	郎	奈	子	遊			郎

(唄)

蔭

離

子

越後獅子

杵屋勝之弥社中

(唄)

杵	杵	津	宮	高
屋	屋	崎	口	須
勝志	勝之	和	順	小
壽佳	嘉	子	子	苗

(三味線)

杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋
勝之	勝巴	勝巴	勝巴	勝巴
鷹	巴	純	乃	介

笛	小鼓	小鼓	立鼓	大鼓	太鼓
藤	中	梅	望	望	望
舍	村	屋	月	月	月
次	寿	小三郎	太明藏	太意三郎	太明吉
生	慶				

杵勝三伝の内

安達ヶ原

杵屋利光社中

(舞台面)

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
寿	勝	勝	勝	浩	禄	寿
希	十	正	七	基	山	哉
	朗	雄	郎			

(三味線)

杵	増	東	朝	杵	晴	杵	杵	城	杵	市	松	大	今	阿	杵
屋	田	音	木	屋	間	屋	屋	田	屋	川	永	林	藤	部	屋
利	翔	味	雄	巳		利	利	和	浩	寿	忠	雅	政	議	巳
次	一	見	治	津	進	輝	光	子	利	憲	次	之	貴	一	之
郎		純	郎	也							郎				助

(唄)

(唄)

(唄)

太	大	立	小	小	笛
鼓	鼓	鼓	鼓	鼓	福
堅	望	堅	望	福	福
田	月	田	月	原	原
新	太	喜	太	貴	寛
十	津	三	三	三	
郎	之	久	郎	郎	

鷺

娘

杵屋勝祿門弟

(唄)

(三味線)

コシノヒロコこと

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
直	丈	巳	祿	利	勝	東
吉	一朗	之助	丈	光	四郎	成

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝	宣	祿	勝	裕	勝	祿宣女
国	三	山	松	光	祿	

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	笛
望	望	堅	望	中	藤
月	月	田	月	村	舎
太三郎	太明之	喜三久	清三郎	寿慶	貴生

杵勝三伝の内

船

弁

慶

高松清香会

坂	杵	杵	今	杵	杵	杵
田	屋	屋	藤	屋	屋	屋
仙	利次郎	祿丈	政貴	巳津也	勝四郎	東成
蔵						

上	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
裕	裕太郎	勝十郎	祿山	勝進次	勝三郎	勝祐香
光						

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	笛
堅	望	堅	望	福	藤
田	月	田	月	原	舎
喜三久	太津之	新十郎	太三郎	貴三郎	貴生

黒

塚

杵屋勝七郎門弟

杵	芳	杵	東	杵	杵	杵
屋	村	屋	音	屋	屋	屋
勝	辰	巳	味	巳	利	勝
彦	三郎	之助	見純	津也	光	四郎

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝	寿	禄	浩	勝	勝	勝
進	希	山	基	松	七郎	浩克
次						

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	笛
望	望	望	望	望	福
月	月	月	月	月	原
太	太	太	太	太	寛
明	明	明	明	明	
吉	之	藏	之	三郎	

網

館

芳村伊四郎御門弟

杵	芳	杵	松	杵	芳	芳
屋	村	屋	永	屋	村	村
東	辰	巳	忠	直	伊	伊
成	三郎	之助	次郎	吉	四郎	四直

杵	杵	杵	杵	杵	杵	杵
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
勝	寿	勝	勝	勝	勝	勝
寿	希	国	国	七郎	禄	国
治		毅	修			

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓	小鼓	笛
望	望	望	望	梅	藤
月	月	月	月	屋	舎
清	太	太	太	小	次
三郎	明	明	意	三郎	生
	之	藏	三郎		

(唄)

(三味線)

抄

曲集

四季遊景抄

隅田の流れ

両国八景

淡雪

鷺娘

若紫

藤頭

虫の聲

秋の色種

舟遊び

佃

四季の里より

昔噺

狸

牡丹

大薩摩

鏡獅子より

大喜利

鞆猿

杵勝会を法人化してから三年目の昭和四十六年九月の大会で、七代目家元が、長唄演奏会の形式に何か新味を考えたいと、慶應義塾の知友池田弥三郎教授、安西英太郎理事の知恵を借り、国立劇場舞台美術研究会の協力を得て、耳で聴くだけでなく、眼で見えて楽しめる演出を工夫しました。

長唄一曲の演奏はとかく時間が長く、一般の人に聞いてもらうのに支障がある。と、かねがね思っていた七代目は、各曲から四分ぐらいずつピックアップして、国立劇場の十一のセリの上げ下ろし、割り、曳き、盆廻しなどをフルに使って一時間のメドレー形式を実行しました。

これが成功して好評を得ましたので、四年毎に催す創立〇〇周年記念の全国大会には、「抄曲集」と名付けて必ず番組の最後に、全員総出演で演奏し、杵勝会名物として皆さまに喜んでいただいております。

今回は、南座の方々のご配慮とご協力を得て、今までとは又一味違った内容を演出いたしましたので、是非ご観賞下さい。

隅田の流れ

両国八景

三下り

(前弾) へ名にし近江の八景を 廓にうつせし桜田の

詞の花の香を慕い つたなき筆に両国の

街によそう柄紅葉(合方)

両国八景

杵 杵 杵 杵 杵
屋 屋 屋 屋 屋
勝四寿 利次郎 勝彦 勝吉治 丈一朗

○
杵 杵 杵 杵 杵 杵 杵 杵 杵
屋 屋 屋 屋 屋 屋 屋 屋 屋
勝国悠 寿希 寿哉 勝寿朗 勝進次 勝正雄 勝国毅 裕太郎 勝進良

淡雪

鷺娘

三下り

(雪音) へふけども傘に雪もって つもる思いは淡雪の

ぬれてはかなき恋路とや(合方)

へ思い重なる胸の闇 せめて哀れと夕暮に

ちらちら雪に濡鷺のしょんぼりと可愛らし(合方)

鷺

娘

杵 松 杵
屋 永 屋
禄 忠次郎 直吉
丈 杵 杵 杵
屋 屋 屋
宣 勝 勝
三 松 禄

笛 藤 舍 貴 生

若紫

藤音頭

～藤娘より～

三下り

(踊地) 藤の花房 色よく長く 可愛いがろとて 酒買うて飲ませたら
うちの男松に 絡んでしめて てもさつても 十返りという名の僧や
帰るといふは 忌み言葉 (合方)
花ものいわねためしでも 知らぬ素振りは・

藤音頭

杵屋勝良	杵屋勝一佳	杵屋和四光	杵屋勝真規	杵屋勝理恵	杵屋勝乃夫
杵屋勝幸恵	杵屋勝代	杵屋勝くに緒	杵屋和季	杵屋勝壽	杵屋勝栄美

秋の色種

虫の聲

本調子

(虫の合方)

二上り

夢は巫山の雲の曲 くもの曙雨の夜に 移すや袖の蘭奢待 (合方)

秋の色種

杵屋勝利光	上杵屋勝国
-------	-------

舟遊び

佃

～四季の里より～

本調子

(佃合方)

二上り

佃つくだと急いで押せば 汐がそこりて
艀が立たぬ しょうがえ 唄ふも江戸の花じゃへ

四季の里

杵屋勝子	杵屋幸昭
------	------

杵屋静子	杵屋勝如	杵屋勝孝	杵屋勝くに光	杵屋勝由葵
------	------	------	--------	-------

(黒御簾)

杵屋勝利郎	杵屋勝彦	杵屋寿典	杵屋丈一朗	杵屋勝六三
-------	------	------	-------	-------

杵屋勝三四次	杵屋勝国修	杵屋勝進良
--------	-------	-------

昔 嚙

狸

本調子

へそれ傳へ聞く 茂林寺の文福茶釜のその由来

怪しくも又面白き(合方)

へ月はさゆれど心はさえぬ さえた月夜も闇となる

山で寝るときや木の根がまくら 柴をしよつたら氣をつけろ

火の用心しやっしやりやしよ(新内流し)

へ自体我等は田舎の生まれ 月に浮かれて腹鼓(合方)

狸

杵屋	勝四郎	杵屋	勝寿治
杵屋	勝彦	杵屋	浩基
杵屋	勝吉治	杵屋	寿哉

囃子 堅田 喜三久

(黒御簾)

杵屋	勝三四次
杵屋	勝国修
杵屋	勝進良

牡 丹

大薩摩

鏡獅子より

(清滝三重)

本調子

(大薩摩)

へ夫清涼山の石橋は人の渡せる橋ならず

法の奇特に自ら 出現なしたる橋なれば

清 滝 三 重

大 薩 摩

杵屋	勝十郎
杵屋	禄山

杵屋 勝之弥

○

杵屋 勝七郎

鞅

猿

(合方) エエイ猿が参つて此方こなたの御知行ごちぎょう まさる目出度めでたき能つかまつる(合)

さるは山王さんおうまさる目出度めでたきめでたきよ(合)天より實たからふが降り下くだつて増生そうじやうすれば綾あやや千反せんたん錦にしきや千反せんたん唐からおり物よ
地には黄金こがねの花が咲き候さかう(合)實げにゆたかなるときなれやさらば我等われらはおいとまと元来もとよし道へ帰らんと
へ花をみすてて帰る雁かりそれも高根たかねの富士筑波つくは名に負おふ隅田すみだの春はるの夕ゆふ景色をここにとどめけりく

[illegible]

千

種

樂

(出演者変更の場合あり)

解 説

「抄曲集」四季遊景抄

馬 場 和 夫

“春寒や船からあがる女づれ” 滅び行く江戸の文化を惜しみ、幕末後の世の動きを余所に戯作生活に徹した永井荷風の句です。両国界隈を近江八景になぞらえて書いた黙阿弥の詞に二世勝三郎が明治九年に作曲した作品の冒頭から幕が明きます。

(隅田の流れ・両国八景)

雪音と共に暗転して、笛一管にのせて果敢なき恋路を辿る娘の声が聞こえてきます。

明治二十五(一八九二)年三月歌舞伎座で九代目団十郎が「鶯娘」を踊った時、十六才の吉住小三郎(後の慈恭)が、まだ見習いの身分だったのを急な代役で三枚目に坐りへほんに涙のつらさえを唄わせられ、これが団十郎の氣に入ったため、却て長唄派からうとんじられ、研精会という独立した長唄の会派を作るキツカケになったという因縁を思います。(淡雪・鶯娘)

色鮮かな藤の枝の下に 踊り地に乗ってセリ上った女流陣による藤音頭。六代目菊五郎は云いました。「踊りの間には教えて出来る間と、出来ない間がある。後者は魔だ。この魔は自分の力で探り当てるのだ」と。長唄の唄と三味線にも通じる名言です。

(若紫・藤娘)

虫の音と共に盆が廻ります。お殿様が長唄人を度々招いて新曲を作らせるなどの間柄だった幕末期、岩手の南部公の詞に十代目六左衛門が作曲した名曲中の虫の合方です。

三味線音楽に特に関心が強いのもなかった谷崎潤一郎が「ほんとうの虫の音を聞くよりは、小三郎と浄観のレコードを聞く方が却て虫の音の感銘を鮮やかに受ける」と書いていくくらいです。

(虫の聲・秋の色種)

黒御簾から佃が聞こえてき、屋形船が漕ぎ出されてきます。柳橋の芸者が客を送って吉原へ行く時船中で弾いた曲が、歌舞伎の下座音楽に使われ、隅田川や船遊びを表わす時には欠かせないメロディーとして普及しました。唄は「四季の里」の一節です。

(舟遊び・佃)

同じく歌舞伎の下座音楽として親しみ深い禪ツトというお寺や淋しい場所を表わす曲に乗って盆が廻りますと、笑いの要素の少い長唄曲としては珍しくおどけた茶気満々の狸が大暴れます。ソソリ節や木樵唄で唄方、新内流し、腹鼓の合方などで三味線が活躍します。二世勝三郎が幕末に作った快作で、初代坂田仙八が得意としましたが、それを次いでこの曲を飄々淡々と楽しんで唄いこなしたのが二代目の坂田仙八で、この人は明治・大正・昭和を通して杵勝家を支えた大恩人です。「狸」を聞いていると、いつもこの人の舞台姿が彷彿と浮んできます。

(昔噺・狸)

山おろしの暗転から下手に清滝三重、上手に大薩摩が登場します。長唄だけではなく、三味線音楽全般から下座音楽に及んで広く使われる三重という手には数十種ありますが、この清滝三重は五世勘五郎が作った明治期のもので、主として獅子物など山にかかわる情景に使われ、清滝三重と名付けたのは九代目団十郎といわれています。

又、大薩摩は、歌舞伎の舞台上手に三味線の人が右足を台に乗せて弾き、唄は左手に本を持って立ち、深山幽谷や荒天の場面にも勇壮に演奏する長唄の一部の曲で、今回は「鏡獅子」に乗せてお聞かせします。

(牡丹・大薩摩)

最後は幹部総出演で、花吹雪舞う隅田堤にわが子に等しい小猿の命が助かった喜びに舞い踊る猿曳きの限らない喜びを、満場のお客さま方と分ち合いながら大団円とさせていただきます。

(大喜利・靱猿)

抄曲集三景

平成二十二年三月十三日（土）国立文楽劇場
第六十回杵勝会関西定期演奏会より



「たぬき」



「靱猿」



「廓丹前」

「南座」のこと

馬場和夫

一六一五年から八年間の元和年間に、京都四条河原に七つの櫓（劇場）が公許されました。出雲の阿国の踊りを以て歌舞伎発祥の地とされる四条河原の劇場は次々に廃絶し、一八〇四年から約二十年間の文化文政時代には、南座の向い側にあった北座との二つになってしまいました。上方唄「京の四季」にへそして櫓の差向い と唄われているのはこの二座のことです。

誇るべき日本文化としての歌舞伎の維持、興行を一手に引き受けている松竹株式会社（創始者、白井松次郎、大谷竹次郎兄弟が、新京極で興行主として打って出た明治二十八年が松竹創業の年ですが、この時にはもう北座も二年前に廃座になり、南座が唯一最後の櫓として残っていて、その南座を明治三十九年に松竹が経営するようになり、以後現在に到るまでに、大正二（一九一三）、昭和四（一九二九）、昭和二十四（一九四九）、平成三（一九九二）年の各年に改装・改築を重ねてきました。

歌舞伎好きの人なら知らぬことのない毎年十二月の顔見世興行は、江戸時代からの由緒深い櫓をかけた桃山風破風造りの前に立ち上げられる招き看板によって、京都のみならず日本の年中行事の一つになっていて、関西のお客は一年をこの興行を区切りと考えているとさえ云われています。

昭和五（一九三〇）年に松竹が東京と大阪の歌舞伎俳優を一手に掌握して以降、この南座の顔見世は事実上東西合同の興行として定着し、初代中村雁治郎の最後となった昭和八年の「三浦助」、今でも話題に残る昭和二十二年の三代目梅玉と六代目菊

五郎の「玉手」と「合邦」など記憶すべき名舞台の数々が演じられてきました。堂本寒星著の「南座」には（昭和四年）、明治元年以降の興行年表が記録されています。

歌舞伎界の古老遠藤為春を案内して、わらしやの鰻雑炊を食べに行った戸板康二に、遠藤さんは「この前先祖歌右衛門と来て以来だ」と云って喜んでくれたが、それは明治四十（一九〇七）年のことだった（当時五世芝翫）ので驚いたと著書（京洛舞台風土記）に書いています。

又、同著に「南座の楽座は劇場の天井の上にあり、東側の部屋に入ると東山が一望のもとに広がっている」とあります。

「顔見世や のぼりの上の東山」と歳時記にあります。

今の南座は、客席総数は一、二、三階で計一〇七八、舞台は木曾繪造り、舞台の上に破風のあるのは今ではこの劇場だけ、十一のセリをはじめ盆廻し、大道具操作、照明、音響、諸種の細い設備も含めて第一級の歌舞伎劇場であり、今回、長唄の杵勝会演奏会は、この施設をフルに活用させていただいて、目で見ても楽しめる長唄演奏を十分に味ってもらいたいと念願しています。



馬場和夫プロフィール

元（株）東宝映画の専務でプロデューサーだが、幼少より長唄に親しみ、アマチュアに徹したまま長唄の伝承・研究に励み、学生長唄その他の世話を続けている。

【贊助出演】

(唄)

芳村 伊四郎

杵屋 直吉

松永 忠次郎

今藤 政貴

東音 味見純

芳村 辰三郎

杵屋 巳津也

杵屋 巳之助

(囃子)

望月 太明藏

望月 太明吉

望月 太明之

望月 太意三郎

望月 太津之

望月 清三郎

梅屋 小三郎

福原 貴三郎

望月 太三郎

堅田 新十郎

中村 寿慶

笛福原 寛

笛藤 舍貴生

笛藤 舍貴生

堅田 喜三久

【杵勝会】

八世家元

杵屋 勝三郎

杵屋 東成

杵屋 勝之弥

杵屋 勝六三

杵屋 勝三

杵屋 勝三

杵屋 丈一朗

杵屋 勝禄

杵屋 勝進次

杵屋 勝七郎

杵屋 勝寿朗

杵屋 勝基

杵屋 勝山

杵屋 宣三

杵屋 寿哉

杵屋 勝進良

杵屋 勝千吾

杵屋 勝千次

杵屋 勝寿治

杵屋 勝国

杵屋 勝四郎

杵屋 勝彦

杵屋 勝光

杵屋 勝吉治

杵屋 勝次郎

杵屋 勝四寿

杵屋 勝裕光

杵屋 勝松

杵屋 勝正雄

杵屋 勝国修

杵屋 勝十郎

杵屋 勝太郎

杵屋 勝国毅

杵屋 勝国悠

杵屋 勝裕辰

杵屋 勝三四次

杵屋 勝和十郎

杵屋 勝利郎

杵屋 勝良

杵屋 勝昭

杵屋 勝一佳

杵屋 勝乃夫

杵屋 幸子

杵屋 幸乃

杵屋 勝里乃

杵屋 勝之里

杵屋 勝四光

杵屋 勝理恵

杵屋 勝乙佳

杵屋 勝真規

杵屋 勝幸恵

杵屋 勝代

杵屋 勝美

杵屋 勝如

杵屋 勝孝

杵屋 勝由葵

杵屋 勝くに緒

杵屋 勝和季

杵屋 勝壽

杵勝会 全国大会 京都南座公演

スタッフ

◆ 大道具

たつた舞台

◆ 装置

榎本 喜久

◆ 照明

笠井 信明

◆ 照明操作

南座照明部

◆ 音響

S・B・S

◆ 写真・ビデオ

ビデオフォトサイトウ

◆ 狂言方

三上 繁二

三上 真二

◆ 事務局

杵屋勝祐輔

木名瀬彩子

◆ アナウンス

菅原 舞子

◆ チラシプログラム表紙

中野仁人 こと 杵屋良基

◆ 印刷

水山産業株式会社

◆ 後援

京都府 京都市

◆ 主催

一般財団法人 杵勝会

〒一〇六―〇〇三二

東京都港区六本木三―十七―十二

TEL・〇三―三五〇五―一〇五二

FAX・〇三―三五〇五―一〇五三

メールアドレス kineya@js9.so-net.ne.jp